

新旧住民の交流を目的とした公共緑地における本の活用可能性の評価

兵庫県立大学大学院緑景観マネジメント研究科 2年
松本万奈

1. はじめに

1.1 背景

本プロジェクトでは、「新住民」となる移住者と「旧住民」となる地域に長期間住む人との交流機会の創出のために本と公共緑地が活用できるかを調査した。両者の交流には課題があり、例えば社会における「よそ者排除」の作用で移住に失敗する(多田, 2016)という報告がある。一方で新旧住民の交流にはメリットがあり、移住者は直接的接触が多いことで暮らしに馴染み、適応していく(高木, 1999)。

今回、「年代や国籍を問わない交流媒体」になりうると考え、本での交流に着目した。徳島のブックカフェの読書会参加者は世代も職業身分も多様である(依岡ほか, 2020)というように属性に関係なく交流がされている。また留学生と日本人との交流に論語読書会が行われている(小田, 2016)ことから他国籍同士の交流にも本は利用されている。公共緑地に着目した理由は読書をしている人は公園の滞在時間が長く(中島ほか, 2009)、公共緑地と読書の親和性は高いと考えられるためである。また屋外であるため解放感も得られ、オープンマインドになることが期待される。

1.2 プロジェクトの目的

公共緑地で本を用い新旧住民同士の会話や、やりとり等の交流の場の創出を行う。

1.3 調査対象地

1.3.1 淡路市

転入者数の緩やかな増加傾向がみられ、令和2年度には転出者が転入者を上回った(淡路市「淡路市総合計画 計画書」, <https://www.city.awaji.lg.jp/uploaded/attachment/31988.pdf>, 2023年12月参照)。これは大規模人材派遣会社(以下A社)の本社移転が理由の一つとして考えられる。A社には社宅があり、社員は地域の人との関わりがあまりないと予想される。

1.3.2 神戸市

2014年に2,441人であったベトナム人人口は2019年には7,476人に増加した(神戸市「神戸人口ビジョン[改訂版]」, <https://www.city.kobe.lg.jp/documents/35913/kobejinkouvisoin1.pdf>, 2023年12月参照)。増加した経緯は1975年のベトナム戦争終戦後、ベトナム難民の受け入れを行い、定住促進センターの支援を受け、日本での生活を開始した(林, 2018)ことに始まる。神戸市長田区などで増加し、これは中小企業が集積する産業地域では言葉が通じなくても働くことができ、安価なアパートが多いことが理由として挙げられる(本多, 2011)。一方で近年は、1975年以降のベトナム人コミュニティがあることから、つてを使って、留学生として来る人が増えている(神戸市「多文化共生都市神戸を目指して～外国人材の受入・共生のた

めの行政対応策～ 報告書」, r1koumei-chosahoukoku8.pdf (kobe.lg.jp), 2023年12月参照) ことが関係している。よって近年移住したベトナム人はベトナム人によってのみ構成されるコミュニティに属している可能性がある。

2. プロジェクトの方法

まず実験内容の検討のため、既存の本の活用事例を調査した。インターネット検索によりまちライブラリーや「絵の本ひろばという」について内容等を把握した。次に交流実態の把握のため、東京都や大阪府のまちライブラリーや「絵の本ひろばという」を訪問し、交流の有無や参加者の把握などを参与観察と主催者へのヒアリングにより調査した。また、各対象地での新旧住民の交流創出に向けた本の活用可能性や課題把握をヒアリングによる予備的調査や仮説にもとづいたアンケート調査から明らかにした。その後、アンケート結果などを基にイベントや調査を実施した。

3. 実践結果

3.1 本に関する施設やイベントの先行事例

神戸市内で活動している「絵の本ひろばという」と大阪府や東京都のまちライブラリーの施設に訪問し、交流状況などについて調査した。訪問場所と訪問日を表-1に整理した。また、両施設のイベント内容や交流状況についても表-2にまとめた。なお今回は知らなかった人同士での会話、やり取りを行うことを交流と定義した。

表-1 訪問場所と訪問日

絵の本ひろば という		まちライブラリー	
場所	日にち	場所	日にち
神戸市森林植物園	2023年5月28日	もりのみや キューズモール	2023年5月7日
白鶴酒造資料館	2023年8月3日	OIC(立命館大学大阪 いばらきキャンパス)	2023年8月5日
北神図書館秋祭り	2023年9月17日	みなとじま	2023年7月6日
		MUFG PARK	2023年9月20日
		南町田 グランベリーパーク	2023年9月21日

表-2 事例の比較

	まちライブラリー	絵の本ひろば という
交流	近隣住民の利用が多く、 常連同士の交流 (ヒアリング) 世代間交流も施設によっては ある (ヒアリング)	単発で行うためその場のみの交流 知り合いではない家族同士の 会話がみられた→子供が交流媒体 (神戸市森林植物園での観察)
工夫	会員がイベントを実施 読書のみしたい人との共存 (磯井, 2020)	塗り絵などの遊べる場所も設置 →立ち寄りやすくする (ヒアリング)
その他	「感想カード」記入による 間接的な交流の創出 (磯井, 2020)	参加者の交流には声掛け等の ファシリテーションの技術が必要 (ヒアリング)

3.2 ヒアリング

3.2.1 淡路島の移住者について

移住者の課題把握のため、ヒアリングを行った（表-3）。A社が主催するホテル観察会の参加者からは、子供の学校でもA社の職場内でも新旧住民でグループが分かれる実態があることがわかった。また移住者の支援を行うNPO法人島くらし淡路では個人の移住者の支援が多く、A社社員がイベントに参加したことは少ないことから、転勤で移住した方は仕事場やイベントなどでも交流機会が少ない実情が見受けられた。

3.2.2 ベトナム人移住者について

ベトナム人移住者の課題把握のため、ヒアリングを行った（表-3）。ベトナム語書店のMacaw Bookstoreでは交流イベントも実施していたようだが日本人が来ても話をする人がおらず、交流している様子は見られなかったということからイベントを実施するのみでは新旧住民の交流は難しいのではという意見を得た。またベトナム人児童を対象に学習支援等を行っているラントイやMacaw Bookstoreへのヒアリングからベトナムでは読書習慣がないことが分かった。

表-3 ヒアリング訪問場所と訪問日

淡路島の移住者について		ベトナム人移住者について	
ホテル観察会 (陽・燦々)	2023年6月23日	ベトナム夢 KOBE	2023年7月6日 2023年8月6日
NPO法人島くらし淡路	2023年7月13日	長田区真野地区ラントイ	2023年8月16日
Omiyageya HATCH 編み物教室参加者	2023年7月25日	Macaw Bookstore	2023年9月20日
NPO法人まあるく	2023年7月26日		
淡路市立津名図書館 淡路市立東浦図書館	2023年8月4日		

3.3 予備実験

対象者課題把握アンケート作成のための予備調査として淡路島公園の芝生広場において2023年5月21日に絵本交換会を行った。参加者は2組。4歳、8歳の子供を持つ母親（新住民）と5歳、8歳、11歳の子供とその母親の計5名で行った。参加者が持参した本の紹介後、互いの本を読み合い、気に入った本の交換となった。録画撮影と事後アンケートを行い、アンケート回答から利用次第で本は交流媒体になりうること、また屋外は交流に繋がる可能性があることが得られた。また、映像分析から子供は公園で自ら他の遊びを模索している様子が見られたり、親同士は本ではなく、子供を交流媒体にして交流をしている様子が見られたりした。

3.4 アンケート

3.4.1 淡路市

2023年7月23日～9月16日に淡路に住み始めて5年以内の移住者（新住民）と地域の人（旧住民）に分けてアンケートを行った。設問数は18問。A社協力のもと、社員にGoogle formのURLを一斉送信した。その他、紙媒体のアンケートを東浦図書館、津名図書館、NPO法人島くらし淡路、omiyageya HATCHに設置した。また国営

明石海峡公園（淡路地区）の夏祭りや津名図書館、東浦図書館、東浦図書館近くの塩浜公園で対面でのアンケート配布を行った。

回答者は172名で、うち移住者は102名となった。回答者全員の回答では7割以上の方がお互いの交流を希望していた（図-1）。また新旧住民の交流の中での課題としては「交流機会がない」ことが最も多く、107人が感じていた（図-2）。

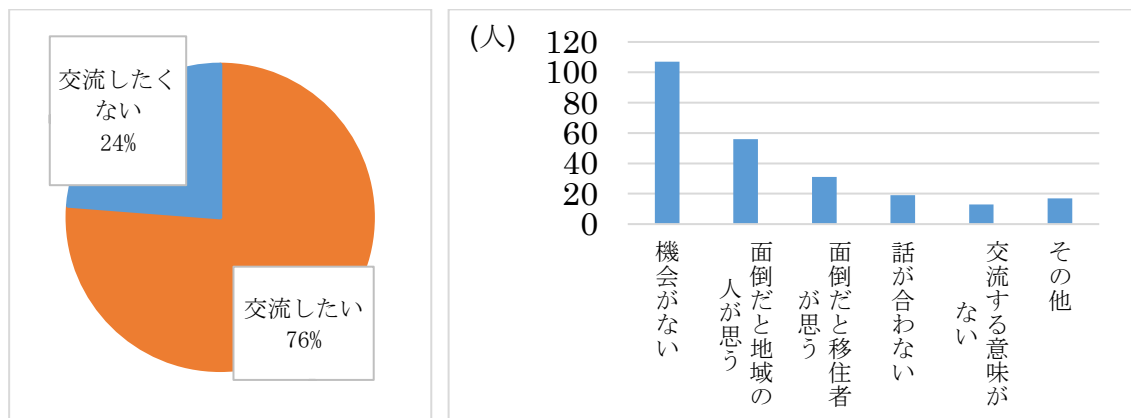


図-1 新旧住民同士の交流希望の割合 (n=164) (左図)

図-2 新旧住民の交流の課題 (n=159, 複数回答可) (右図)

3.4.2 神戸市

2023年10月2日～10月15日に神戸市在住ベトナム人に対してアンケートを行った。設問は21問でGoogle formでの回答を募った。Google formのURLを、主に神戸に住むベトナム人からなるFacebookグループ(グループ人数6万4千人)に本学留学生の協力のもと送信した。またQRコードを記載したチラシをふたば学舎、長田図書館(配布依頼のみ)、和楽寺、KICC(配布依頼のみ)に配布した。回答者数は9名であった。

約半数の4人が日本人との交流があった。また9人のうち8人が日本人との交流を希望していることが分かった。本を読まない人は2人いたものの、ベトナムでは読書習慣があまりないというヒアリング結果に反して、4人がベトナム語の本を、3人が日本語の本を読んでいるということが分かった。またこちらでも、新旧住民の交流の課題は「交流の機会がない」ことが最も多く、7人が挙げていた(図-3)。

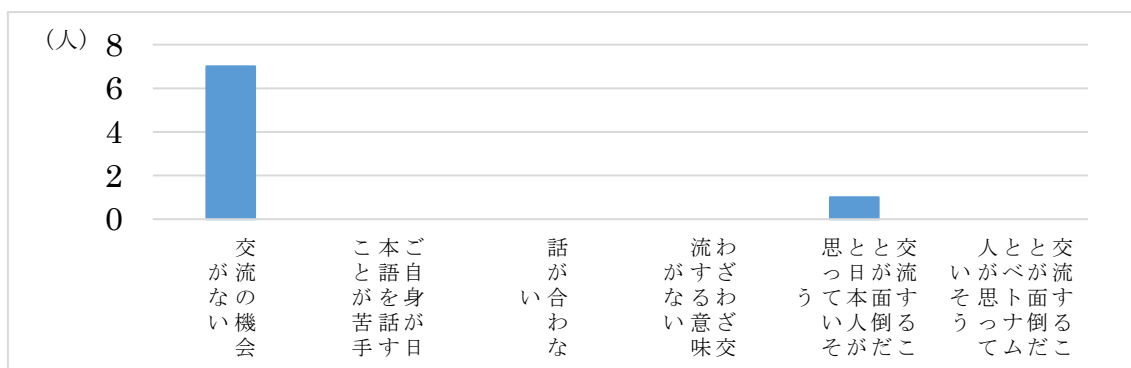


図-3 新旧住民の交流の課題 (n=9, 複数回答可)

3.5 本棚のノートへの記入による交流調査

淡路島公園で2023年11月18日に本の紹介会と古本譲渡会を行う予定だったが、参加希望者が1名のため中止とした。他イベントが多い時期であったこと、イベントが魅力的でなく、ハードルが高く感じたことが理由と考えられる。このことから本が関係することでイベントを「まじめ」「堅い」と捉えられる可能性があると考えられる。また2023年12月に神戸市長田区真野地区の南尻池公園でベトナムコーヒーやベトナムのお菓子等の飲食を伴った本の交流イベントを計画していたが、真野まちづくり協会職員の「1年以上前からベトナム人との関係構築が必要である」との助言からイベントの実施を断念した。以上の2件のイベント中止から本の単発イベントでは集客が難しいことが分かった。

次にまちライブラリーの「感想カード」を参考に、公共緑地へ本棚の設置をし、そこに本の感想や他の人へのコメントを書くノートの設置することで交流の起点になるかの調査を淡路市と神戸市で行った。淡路市では2023年12月7日～27日に淡路景観園芸学校キャンパス内の一般公開されているALPHAガーデンの敷地内に本棚を3カ所設置した。設置場所は比較的人通りがあると考えられる多目的ホール前、ガゼボ前、花の庭テラスガーデン付近とした。書籍は様々なジャンルから計33冊を用意し、各本棚に11冊ずつ設置した。また、本棚の認知と利用者の増加のために、2023年12月16日に本の紹介会を計画したが、参加者が集まらず未開催となった。神戸市では長田区新湊川公園のウジャマー菜園の出入口に2024年1月5日から同様の本棚を1台設置し、ベトナム語の本を含む計11冊を置いた。

淡路市ではノートの利用として11件の記入があったが、他の人へのコメントはなく間接的な交流は見られなかった。また2024年1月5日に本棚利用者1名にインタビューを行った。神戸市ではノートの利用がなく、9名のアンケートの回答（いずれも日本人）を得た。

公共緑地に関しては「寒くて長くいられない」という意見が淡路市のノートへの記入やインタビューから多く得られ、寒い時期での屋外の本棚の利用は難しいことが分かった。本棚の見た目に関しては「本棚の位置が低い」「触ってはいけないと思った」などからある程度の高さがある本棚や気軽に利用しやすい見た目の本棚が必要になることが分かった。本の種類に関しては「短編で学内でも読みやすい」「野菜栽培の本が欲しい」などから利用者の訪問頻度やその公共緑地の特色で本の需要が変わっていた。

4. 考察・結論

目的は「公共緑地で本を用い新旧住民同士の会話や、やりとり等の交流の場の創出を行う」ことであった。各市のアンケート結果やヒアリングから、新旧住民の交流機会は求められていたが、現状として交流機会が少ないことがわかった。一方で本のイベントに関しては、実際のイベントでは子供が交流媒体になっている様子が見られたことや交流に繋げるにはファシリテーションの技術が必要であり、誰にで

もできるわけではないということから本を媒体として交流に繋げることは難しいという結論となった。また、公共緑地に設置した本棚では寒くて本の利用ができないという意見が得られたことや、天候不順に伴いイベントの延期をしたことから公共緑地での本の利用は難しいということが分かった。以上から今回は「新旧住民の交流機会は求められているが、公共緑地で本を用いての交流は難しい」という結果になった。

5. 課題

予備調査のアンケートや本棚調査から、イベントは気候の良い限られた時期にしかなできないということは明らかであると考えられる。その上で、「絵の本ひろばという」の「図書館で静かにできない人に向けて行っている」というコンセプトから公共緑地の機能を利用した事例があること、また神戸市のウジャマー菜園での本棚調査で「野菜栽培についての本が欲しい」という意見があったことから本の内容と公共緑地をつなげる工夫が必要であること、の3点から「気候の良い時期に「公共緑地+本+共通の関心事」というテーマで行うことで上手くいくのではないか」という仮説が立てられる。ここでの「共通の関心事」とは公共緑地の特性と本の内容をつなぐものを指し、例えば菜園では料理イベントや野菜栽培の実践イベントなど、公園や植物園では植物や生き物探索、草花遊びなどが考えられる。この仮説を参考にイベントを行い、交流に繋がるかの調査が今後必要になると考えられる。

引用文献

- 多田忠義 (2016) 移住促進政策の変遷と課題 鳥取県鳥取市の事例を踏まえて (地方創生と農業・農村). 農林金融. Monthly review of agriculture, forestry and fishery finance/農林中金総合研究所 編. 69(5), 258-275.
- 高木学 (1999) <論文> 過疎活性化にみる 「都市-農村」 関係の諸相 I ターン移住者を巡る地域のダイナミズム. 京都社会学年報. KJS, 7, 121-140.
- 依岡隆児・星野凜 (2020) ブックカフェという 「場」 における読書会について— 地域における読書振興活動の観点から— . 言語文化研究. (28), 165-180.
- 小田光男・オダミツオ (2016) 論語読書会. 中国研究集刊. 62, 143-145.
- 中島直子・由比藤直美・室田昌子 (2009) 海の見える公園での着座者の利用行為に関する研究 横浜市臨港パークを対象として. 都市計画報告集. 7(4), 96-99.
- 林貴哉 (2018) ベトナム人集住地域における複数言語の使用と学習に関する研究 日本に定住した中国系ベトナム難民のライフストーリーから. 言語文化教育研究. 16, 136-156.
- 本多あずさ (2011) 在日ベトナム人の移住から見た定住 —神戸市長田区を事例として—. 大阪公立大学人間行動学科地理学コース卒業論文.
- 磯井純充. (2020). “まちライブラリー” を活用した地域の場合づくりに関する研究: 「個」 の活動が活かされる社会への道程.